

変わりゆくポーランドの復活祭

津田晃岐

ポーランドの西部の町、ポズナン市に住み3年になる。市内のアダム・ミツケヴィチ大学と外国語大学で教鞭をとっている。かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998年から2000年にかけてクラクフ市に留学。ポーランド人が日本をどのように見ているか、そして現在のポーランドがどう変わったかを興味深く眺めている。



「キリスト復活」
スイスター・フォン・メスキルヒ画

1. 「大断食」と「聖週間」

復活祭はキリスト教徒にとって、一年で最も重要な祝日である。「復活祭は春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」と決められており、年によって変わる移動祝日である。ポーランドでは翌月曜日も休日である。

復活祭の準備は、その一か月以上前から既に始まる。四旬節である。四旬節は、灰の水曜日から聖木曜日まで40日（日曜日を除く）続く。ポーランド語で「wielki post 大断食」と呼ばれる通り、もともとは飲食を制限する期間だが、それは何より、来たる復活祭を心身ともに清めて迎えるためであり、そこから、日頃の自分を顧みて食事の節制、遊興の自粛、罪の償いを行なう期間でもある。ローマ・カトリック教会では、特にこの期間の祈り、断食、慈善が奨励されている。信者の中には、この時期に特別の「postanowienia wielkopostne 四旬節の決意」を自らに課す者もいる。

例えば、私のコーヒー好きの友人は毎年wielki postの期間中コーヒーを断つ。また、wielki postの期間中は毎日ミサに参加することを決めた友人もいれば、この時期に慈善行為として纏まった金額を教会や貧しい人々に寄付した者もいる。

さらに、ローマ・カトリック教会が定める「カノン法」によれば、カトリック信者は「少なくとも一年に一度は、自らの大罪をすべて正直に告白する義務」（989条）があり、同時に「少なくとも一年に一度は、ミサ聖祭を受ける義務」があり、後者の義務は「復活祭の時期に果たされるべきである」（920条）とされている。もちろん、大罪を告白（いわゆる「告解」。俗に「懺悔」とも言う）しないままでミサ聖祭（ここでは「聖体」のこと）を受ければ、これまた大罪と見なされているので、復活祭が近づくにつれ、告解に向かう人の数も増えてくる。そしてこの時期、突如として生れ変わったかのような、あ

るいは気持ち悪いくらいに善人となった人々が周囲に溢れる。昨日も普通に会っていた友人から突然謝罪され、赦しを求められることもある。これは何も敬虔な信者の間だけに限らない。ふだん教会に通っていない人達も、かなり多くの者がこの時期、告解をし、心を綺麗にしようとしているようだ。もちろん一時的な回心だが、今も毎年繰り返されている光景である。ちなみに、四旬節の期間中は教会のミサでも、その他の祈りでも「Alleluja アレルヤ」（ヘブライ語起源で「主をほめたたえよ」という意味）は唱えられない。

復活祭前の一週間は「Wielki Tydzień 聖週間」と呼ばれ、各家庭で復活祭のための具体的な準備が始まる。すなわち、大掃除と料理である。あちこちで絨毯を叩く音が聞こえる。窓を洗い、家中の埃を払う。この機会に、家の壊れている箇所を修理する。それから買い出しもする。そして、料理が始まると、家の中に居場所のない男衆は、手持無沙汰に往来に集まり、ビールを片手に立ち話をしている。

聖木曜日の夜のミサからは「triduum paschalne 過越の聖なる三日間」が始まる。聖木曜日の夜のミサは「主の晩餐のミサ」と呼ばれ、イエスがミサの形式を定めた最後の晩餐を記念したミサである。弟子の足を洗ったイエスに倣い、洗足式も行われる。聖金曜日は、一年で唯一ミサが行われない日である。ミサの代わりに「主の受難の祭儀」が行われ、イエスの受難と死を偲び、十字架の礼拝が行われる。聖金曜日は「大齋」と「小齋」の断食が奨励されている。

聖土曜日の日中には、小籠に食べ物を詰めて教会へ行く。「święconka」と呼ばれ、聖土曜日に教会で聖水を振り掛けられて聖別された食べ物である。伝統的には、子羊の人形（バター製、砂糖製、チョコレート製、プラスチック製などがあり、十字架や「Alleluja アレルヤ」の文字が描かれた赤い小旗が添えられることが多い）、パン、塩、イースター・エッグ（着色・装飾されたゆで卵で、一色に染められた卵をkraszanka、柄の描かれた卵を

pisanka と言う)、西洋ワサビ(chrzan)、肉(豚肉のハムかソーセージであることが多い)などが小籠に入れられている。小籠の食べ物にはそれぞれ意味がある。しかもキリスト教の伝統の背後に、ユダヤ教の伝統やキリスト教以前のスラヴ文化の影がちらつく二重、三重の象徴体系になっている。——子羊の人形は、自らを生贄の子羊として神に捧げ、その死によって全人類の罪を贖い、その復活によって死・罪・悪に打ち勝ったイエスを象徴している。赤い小旗は受難の、しかし勝利の戦旗である。ユダヤ教の「過越祭」(「除酵祭」とも言う)の日には、子羊を屠って食べる伝統があった。パンは、イエスの体を象徴すると同時に命の糧をも象徴する(「わたしが命のパンである。」ヨハネによる福音書 6 章 35 節)。そしてユダヤ教の伝統においては、イスラエル民族がエジプトを出た後、40 年間砂漠をさまよっていた時に空から降ってきたパンを思い出させる。塩は、キリスト教徒の使命(「あなたがたは地の塩である。」マタイによる福音書 5 章 13 節)を象徴するとともに、腐敗からの守り、悪霊からの清めを象徴である。ユダヤ教の伝統においても、塩は神との契約を象徴し、神に献げ物をささげる時は塩をかける。イースター・エッグは、新しく生れる命を象徴し、イエスの復活と洗礼による新しい命を象徴すると同時に、家族で卵を分かち合うことで一家の子宝・繁栄を象徴する。西洋ワサビは、イエスの受難の苦しみの克服の象徴であると同時に、生命力や精力の象徴でもある。肉は、家族が飢えることのない、不自由な暮らしの象徴である。



籠の中には、子羊の人形(菓子)・パン・塩・イースター・エッグ・西洋ワサビ・肉(ソーセージ)が詰められている

私達が小籠を持って教会に行った時には、同じように籠を持って集まった人達で教会は一杯だった。しかも驚いたことに、こうした食べ物の聖別は、聖土曜日の中 20 分置きに行なわれていたのだ。私達がいた時にだけ、偶然一杯だったとは思えない。加えて、同様の聖別は各教区の教会でやっているのだから、教会離れが叫ばれてはいても、まだまだポーランドはカトリックの国なのだと思います。

聖土曜日も、日没後に行なわれることになっている復活徹夜祭のミサまでは、断食が奨励されているので、日が暮れると、身を綺麗にし、晴れ着を着て、お腹を空かせて、教会に向かう。そして、夜を徹した復活祭のミサに参加するのである。

復活祭のミサは、断食が奨励されているので、日が暮れると、身を綺麗にし、晴れ着を着て、お腹を空かせて、教会に向かう。そして、夜を徹した復活祭のミサに参加するのである。

2. 「パスハ」

辺りが暗くなり、すっかり夜になった頃、復活徹夜祭が始まる。復活徹夜祭は内容的に非常に豊かで、時間的にも非常に長い。5 時間以上続くこともある。

復活徹夜祭は、4 部構成になっている。第 1 部は「光の祭儀」、第 2 部は「ことばの典礼」、第 3 部は「洗礼の儀」、第 4 部は「感謝の典礼」である(ふだんの日曜日のミサは「ことばの典礼」と「感謝の典礼」から成る)。

「光の祭儀」では、電灯が消され、教会全体が文字通り闇に包まれる。やがて火が起こされ、火と蠟燭(「paschal パスカル・キャンドル」と呼ばれる大きな蠟燭)が聖別され、復活したイエスの象徴である蠟燭がその灯とともに真っ暗な教会に入ってくる。そしてその蠟燭から、信者が各自持っている小さな蠟燭に灯が分けられ、灯は蠟燭から蠟燭へと広がっていき、ついには教会全体を照らし出す。これは罪の暗闇、あるいは罪の結果としての死の暗闇にイエスが入ってきて、救いの光を与え、その光が世界に広がっていくことを表している。美しい光景である。

「ことばの典礼」では、聖書から 9 つの箇所(ふだんの日曜日のミサでは 3 つの箇所)が朗読され、朗読と朗読の間には詩編が歌われる。最後に読まれる福音書以外の 8 つは、毎年同じ一節が読まれる。旧約聖書から 7 つが取られており、神が天地創造の瞬間から人類の救いを望んでいたという救いの歴史が語られる。その後で新約聖書から、洗礼について語る使徒の手紙、イエスの復活の場面を伝える福音書がそれぞれ朗読される。

「洗礼の儀」とは、いわゆる洗礼式で、水の祝福、諸聖人への連願、信仰宣言が唱えられた後、受洗者は聖水を掛けられ(あるいは聖水のプールに浸けられ)、新たな信者となり、教会の共同体の一員に加えられる。洗礼式を見守る他の信者達は、自らの洗礼を思い出しながら「odnowienie przyrzeczeń chrzcielnych 洗礼の約束の更新」を唱える。洗礼によって人間は、これまでの古い性質をその罪とともに洗い流され、今や神の意志にしたがって生きる新たな命を受けるのである。

“わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。”

(ローマの信徒への手紙 6 章 4 節)

「復活祭」はふだんポーランド語で「Wielkanoc」と呼ばれる。「(イエスが復活した) 大いなる夜」という意味である。しかし「復活祭」を表すもう一つの言葉がある。主として神父や敬虔な信者によって用いられる

呼称だが、「Pascha パスハ」と言う。「パスハ」は、イスラエル民族がエジプトを脱出した「過越(ヘブライ語で“pesach”)」の夜とそれを記念したユダヤ教の「過越祭」から採られている。というのも、イエスが聖木曜日の最後の晩餐でミサの形式を定めたとき、ユダヤ教ではちょうど過越祭が祝われており、イエスは弟子達と伝統的な過越祭の食事をしながら、同時に新しい形の「過越」の祭、すなわちミサ聖祭(キリスト教のミサ)を定めたからである。

“イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」”(ルカによる福音書 22 章 15 節)

こうしてイエスは、新しいミサ聖祭(キリスト教のミサ)を意図的にユダヤ教の「過越祭」になぞらえる同時に、自らの受難と死と復活をもイスラエル民族の「過越」に重ね合わせる。つまり、ファラオのエジプト軍に追われた絶体絶命のイスラエル民族が、葦の海(紅海)を渡って逃れ、新たな命を得たことを思い出させる。現に復活徹夜祭の朗読の一つは、出エジプト記のこの場面である。水は、ここでは新旧を分かち死の象徴である。そしてこのことは、復活祭に洗礼式が礼式が行われることもあるが、ローマ・カトリック教会では、行われることと無関係ではない(ふだんの日曜日に洗礼式が行われる時期として復活祭がもっとも相応しいとしている)。洗礼の水を経て、人間の古い性質が死に、新しい人間として再生するのである。こうしてユダヤ教の「過越」、キリスト教のミサ、復活祭、そして洗礼式は、死からの再生、あるいは新たな命によって、互いに重なり合っている。

「感謝の典礼」は、ふだんのミサの場合と同じで、聖変化と聖体拝領が行なわれる。今夜初めて洗礼を受けた信者が成人の場合は、ここで初めての聖体を拝領する。

そして、四旬節から今まで唱えられることのなかった「アレルヤ」の朗唱によって復活徹夜祭は終わりを迎える。

復活徹夜祭のミサを終え、既に明け方、タクシーで帰ろうとした私達にタクシーの運転手は冗談半分に訊いた。「こんな時間に、どこからの帰りですか?」「教会からの帰りです」タクシーの運転手はピンと来ない様子だった。それで、急に真面目になって尋ねた。「教会で、何があったんですか?」「復活祭のミサが今終わったんです」驚いたタクシー運転手はそれ以上何も訊かなかった。



エジプト軍が追う中
モーゼとともに出エジプト

3. 「復活祭の朝食」

復活徹夜祭のミサの後は、早朝にも関わらず、復活祭の特別な朝食が取られる。「復活祭の朝食 *śniadanie wielkanocne*」と呼ばれる特別な朝食で、この瞬間のために数日前から準備されていたものである。教会の共同体の信者達と一緒に(レストランなど借り切って)食べる場合もあるが、家に戻って家族と食べるのが伝統である。

「復活祭の朝食」の伝統的なメニューと言えば、ゆで卵、ハム、ソーセージの他に、「*zurek wielkanocny* 復活祭ジュレク」(ふだんのジュレクと違うのは、西洋ワサビを入れることと生クリームを加えて白く仕上げること。中部および東部ポーランドではジュレクの代わりに「*barszcz biały* 白バルシチ」を食べることもある。「白バルシチ」も、ふだんビーツから作る赤いバルシチとは違い、肉の煮汁から作られ、酸味を加えられる)、「*bigos* ビゴス」、「*salceson* サルツェソン」(豚の頭肉などを細かく切り、香辛料とともに煮てゼリーで固めたもの)、「*kaszanka* カシヤンカ」(豚の血と蕎麦の実を詰めた腸詰)などがある。デザートでは、「*mazurek* マズレク」(キャラメルソースやチョコレートやジャムや砂糖を表面に塗って焼いたクッキーで、復活祭の時期に焼かれる)と「*babka wielkanocna* 復活祭バプカ」(先端を切られた円錐形のケーキで、真中が空洞になっている。表面には砂糖やチョコレートなどのソースが掛けられており、干し果物やナッツ類が散らされていることもある)などがある。

家族との朝食では、全員がテーブルに集まり、一家の主がテーブル上の蠟燭を灯し、掲げ、「ルカによる福音書」の一節(イエスの復活の場面)が朗読される。続いて、一家の主は家族全員と家屋の全体に、聖水(事前に教会からもらっておく)を振り掛けてまわる。その後で、聖土曜日に聖別してもらった「*święconka*」の卵を各自が一切れずつ取り、互いの卵を食べ合いながら、相手のために願い事をする。そしてようやくテーブルに着き、朝食が始まる。

朝食が終わると、「*szukanie zajączka* ウサギ探し」が始まる。家族総出の遊びで、家の中や庭のどこかに隠されたプレゼントやお菓子を探し当てる。探す者以外は、歌や諺や言い回しや駄洒落を言いながら、どこにあるかを仄めかす。ウサギは罪人、新たに洗礼を受けた者、子沢山(子孫繁栄)の象徴として、イースター・エッグやクリスマス・ツリーと同じく、ドイツからポーランドへ入ってきた。

復活祭の午後には、「*Emaus* エマオ」という伝統もある。エマオに向かっていた二人の弟子が復活したイエスに出会うという福音書(「ルカによる福音書」)のエピソードから採られたもので、復活祭の日の午後の散歩を言う。ももとは巡礼的性格を持った散歩で、行き先(教会や礼拝堂)をエマオに見立てたものだが、

現在では、特に目的のない普通の散歩の他に、近い人々や病人を訪問することもある。そして翌日、復活祭月曜日は「lany poniedziałek 水かけ月曜日」とも呼ばれ、「śmigus-dymigus シミグス・ディングス」が行なわれる。もともとキリスト教以前のスラヴ民族の風習だったものが、後にキリスト教の復活祭月曜日と結び付いたのである。「シミグス」は、病や穢れから身を清めるために、柳や椰子の枝で足を叩いて互いに水を掛け合う春の習慣だった。この「病や穢れ」が後に

「罪」に代わった。「ディングス」は、イースター・エッグを差し出す代わりに水かけを勘弁してもらった習慣である。2つの習慣は15世紀頃に結びついたらしい。また、ポーランドの一部の農村では、復活祭の日の出とともに農夫が自分の畑に聖水を振り掛けてまわる風習があった。この場合、水は多産と生命の象徴である。この風習は、現在でも南部ポーランドに残っている。なお、キリスト教では、水は「罪」を洗い、新しい命を与える洗礼と結びついている。

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)

第59回例会報告



企画してよかった！

2012年3月31日、ポ文協の第59回例会「樺太のポーランド人の軌跡－彼らはどこからきて、如何に行き、どこへ帰ったのか」が、かでの2・7、510会議室で開催されました。当日は、春嵐が吹き荒れる悪天候にもかかわらず、会員10名、一般17名の計27名の方々にご参加いただきました。

例会では、当協会の運営委員である、樺太豊原会の尾形芳秀さんが講師を務めてくださいました。北海道庁赤レンガ館にかかる一枚の写真から始まったお話は、樺太の地に生きたポーランド人たちの苛酷な運命、彼らと日本人との交流、アイヌ研究者ピウスツキのことなどを話題にし、樺太を舞台にした大きな歴史ドラマを見る思いでした。

会場にお越しいただいた皆様も、歴史の重みとそこで懸命に生きた人々の姿に思いをはせ、大きな感銘を受けたご様子でした。お話の後には、「ピウスツキは蠟管をどこから手に入れたのか」など聴衆から矢継ぎ早に興味深い質問が出ました。講師の尾形さんは、ご自身の体験から関心を持たれたテーマに関し、幅広く資料渉猟し、またサハリン、ベルリンなど海外にも足を運び調査され、実証的でありながらも、「血の通った」お話をしてくださいました。書物の狭い世界に閉じこもりがちな大学教員である私は、襟を正されるような思いをすると同時に、企画して本当に良かったという思いでいっぱいになりました。(佐光)

～講演会～

樺太のポーランド人の軌跡

－彼らはどこから来て、如何に生き、どこへ帰ったのか－

- ◆ 日時：2012年3月31日(土) 14:00～16:00
- ◆ 場所：かでの2・7 510会議室
(中央区北2西7)
- ◆ 主催：北海道ポーランド文化協会

講演者の

おがた よしひで
尾形 芳秀さん



心を驚づかみにされた講演会

尾形さんは1937年、樺太の豊原にお生まれになり、樺太の残留や亡命ポーランド人とともに旧市街で育ち、遊び、同じ学校で学んだという。樺太の敗戦前後の状況を知る人を探し続け、多くの偶然に導かれ重要な証言を得る。また、数奇なご経験を貴重な映像を通して聴衆に提供していただき、自ら樺太を語り継ぐ方だったのだ。渾身の講演会にはひたすら感謝し、そのリアルさに驚くばかりだった。

樺太は不思議な島だった。北方少数民族が住む自然豊かな島、間宮林蔵が調査に行き半島ではなく島であることを証明した島。日露混在時代を経て、ロシア領になった時代。帝政ロシアによる流刑囚の島の時代。日露戦争後は、日本軍の全域占領の島。そして、現在は国内で発行されている地図なら南樺太は日本とも、ロシアとも違う色に塗られている島だ。

さらに驚いたのは、参加者の関心の高さだった。尾形さんのお話真剣な表情で耳を傾ける中には、釧路・旭川近郊からもきてくださった方。その場で入会してくださった方も。今後の協会の企画力に一石を投じてくださった貴重な講演会になった。(氏間)